

英雄の表象——中国の烈士陵园を中心に

高山陽子

はじめに

中国の各都市には烈士陵园という革命烈士の墓地がある。二〇〇八年に公開され、大ヒットした映画『狙った恋の落とし方。』（非誠勿擾）の中で主人公の秦奮が「以前は国の英雄（烈士）だけが墓地で、庶民は納骨堂さ」と述べるように、土地が限られる都市部において納骨堂ではなく墓地に埋葬されるのは特別な場合であった。烈士は革命で犠牲になった人という意味で、映画の訳語にある通りに国の英雄である。

烈士は新中国成立以前から使われている言葉であるが、正式な身分としては一九五〇年に定められた。それは、辛

亥革命（一九二一）、北伐（一九二四～一九二七）、第一次国共内戦（一九二七～一九三七）、抗日戦争（一九三七～一九四五）、第二次国共内戦（一九四六～一九四九）、五四運動（一九一九）以降の反帝国主義闘争で死亡した人々を指す（『人民日報』一九五〇年一〇月一五日）。烈士の家族は「列属」と呼ばれ、範囲は両親・配偶者・子供・一六歳以下の子弟姉妹と定められた。軍人の家族である「軍属」と同じく、「列属」は土地や農具、食料などを優遇される他、医療費の減免や学費の補助などが受けられた（『人民日報』一九五〇年二月一四日）。朝鮮戦争の死亡者も革命烈士と見なされたが、別に戦闘英雄という身分も定められ、黄継光（一九三一～一九五二）と楊根思（一九二二～一九五〇）は特級戦闘英雄となった。一九五〇年二月一日には内務部が烈士の遺族に仕事の斡旋や援助、子供の



写真1 撫順雷鋒記念館 (出所) 筆者撮影 2011年9月



写真2 記念館で展示される黄繼光のパネル

(出所) 筆者撮影 2012年8月



写真3 黄繼光墓 (出所) 筆者撮影 2012年8月

授業料の補助をすることを公布した。

無数の烈士のうち、とくに知られているのは、雷鋒（一九四〇～一九六二）や劉胡蘭（一九三二～一九四七）、張思德（一九一五～一九四四）、黄繼光、楊根思などである。

劉胡蘭は、一九四七年一月二日、国民党軍に殺害されると、すぐに劇化され新中国の象徴となった（関二〇〇五）。雷鋒も同様に、死後、毛沢東の「雷鋒同志に学ぼう」というキャンペーンを通して神話化され、撫順に雷鋒記念館が開館した（写真1）。雷鋒は、トラックや「毛沢東選集」、松の木、解放軍の防寒帽子、赤いスカーフ、銃

などの道具と一緒に描かれる理想的な烈士となった（武田二〇〇九）。黄繼光は、朝鮮戦争後半で最大の死傷者を出した上甘嶺戦役において、爆破任務のために自分の体を犠牲にして敵の機関銃の銃口を塞いだ。その場面は記念館において再現され（写真2）、墓は瀋陽抗美援朝烈士陵园の墓地部分の中心部に置かれた（写真3）。

近年、烈士の姿は図1のように、文化大革命期のプロパガンダ・ポスター（宣伝画）を用いたトランプに見られる。図1の「革命英雄」のトランプを左上から順に見ると、「人民に奉仕した模範 張思德」（ジョーカー）、「偉大

な共産主義戦士 雷鋒（ジョーカー）、「抗日女英雄 劉胡蘭」（スペードのキング）、下段には「抗日女英雄 趙一曼」（ハートのエース）、「国際主義戦士 楊根思」（クラブのエース）、「国際主義戦士 黄繼光」（ハートのジャック）となっている。

一個人の死はどのようにして革命の歴史の一場面として語られるようになり、革命観光（紅色旅游）において土産

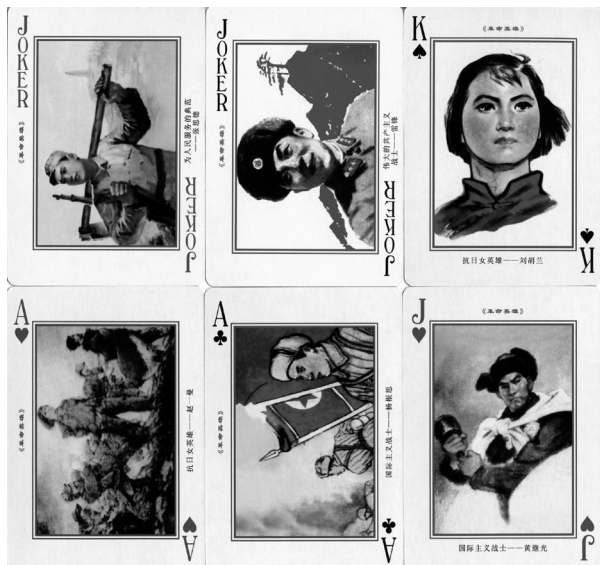


図1 「革命英雄」トランプ
（出所）明虎扑克の紅色シリーズ

物のコンテンツとして用いられるようになったのか。本稿では、烈士の追悼会や記念式典、烈士陵园などの近代的な制度や設備の導入に着目し、近代中国がどのように社会主義の記憶を視覚的に表してきたのかを革命烈士という英雄の表象を通して考察する。

I 烈士の追悼会

辛亥革命以前に死亡した人物にも烈士という称号が用いられる。たとえば、一九〇七年、武装蜂起に失敗し紹興で処刑された徐錫麟（二八七三〜一九〇七）と秋瑾（一八七五〜一九〇七）は烈士と呼ばれる。最終的に徐錫麟は杭州の演福寺に、秋瑾は杭州の西湖湖畔に埋葬されたが、烈士の墓をどこに置くのか、烈士をどのように祀るのかは難しい問題であった。秋瑾らの身分は、辛亥革命前は「反逆者」であっても、新政府成立後は「英雄」に変わり、革命の犠牲者として盛大に祀ることが新政府の正当性を示すために望ましいことであった。さらに、民間風俗として葬儀や祖先祭祀を見た場合、莫大な費用と時間を要する伝統的な葬儀を改革することは近代化の一項目でもあった。

武装蜂起の死亡者を国家的な英雄として称え、新しい形で追悼式典を行った最初の事例は、黄花崗烈士である。一

九一年四月二七日(旧曆三月二九日)、広州で中国同盟会が武装蜂起したが、失敗し、七二名(後に八六名と判明)が死亡した。すぐに潘達微は蜂起の死者を広州の東門近くの紅花崗に埋葬し、烈士墓苑を作ることを計画した。

一九二一年に完成した黃花崗公園には自由の女神像が建てられ、紅花崗から遺体が搬送された。三月二九日には追悼式典が催されるとともに、墓苑の増築も行われ、一九二四年と一九三四年には改修式典が催された。また、一九三〇年、国民政府は三月二九日を革命先烈記念日とし、一九三五年には中華民国成立記念日(一月一日)や総理逝去記念日(三月二日)などの九日の国定記念日の一つとした。

また、北京政府は一九一六年に国葬法、一九二八年に公墓条例を公布し、新しい葬儀および墓の形を定めた。最初の国葬は一九一七年四月、長沙で営まれた蔡鍔と黃興の葬儀であった。生前、黃興と交流のあった宮崎滔天(一八七〇―一九二二)は葬儀に参列するために一九一七年二月に長沙へ向かった。その様子を滔天は一九一七年二月一五日から五月二三日まで『東洋日の出新聞』に「湖南行」として連載し、葬儀前の四月一日夜、満席の新劇社において黃興の半生を描いた芝居を鑑賞したことや、葬儀前の二日間、終日、参拝者が途絶えることはなく、さらに一五日の国葬の日には外国人を含む多くの人々が集まったことなどを記した。黃興の棺は黃公營葬務事務所を午前九時に出棺

し、爆竹が鳴り響く道を進み、午後三時に墓地となる嶽麓山に到着した。墓穴の前に設けられた祭壇に大統領代理、湖南督軍の譚延闓(一八八〇―一九三〇)が礼拝して祭文を読み、それに続いて日本領事が領事祭文を読んでから退いたという。蔡鍔と黃興の墓地は公園となることが決まっており、すでに道路工事が始まっていたと記している(宮崎一九七一・五四〇―五五四)。

一九二五年に死去した孫文も国葬扱いになったが、国民葬や党葬にすべきであるという意見も寄せられた(『民国日報』一九二五年三月一六日)。北京政府に従って国葬にすれば、孫文が生前大元帥を務めた広東政府は正当性を失うためであった(『晨报』一九二五年三月一三日)。結局、三月一四日に国葬とし、南京の紫金山に埋葬することが決まった(『民国日報』一九二五年三月一四日)。三月一九日一時、孫文の遺体は協和医院から中央公園の社稷に移され、三二発の弔砲が放たれた。孫文追悼会は北京や上海、広州などの学校や公園で開催されると同時に、中山大学と中山公園の建設が計画された(『民国日報』一九二五年三月一九日)。

孫文追悼会のように、一九二〇年代には学校や体育館、公園などの公共の場で記念式典や追悼会が催された。その中でも規模が大きかったのは一九二五年六月三〇日の五卅烈士の追悼会であった。一九二五年、上海の日系紡績工場

で働く労働者たちが賃上げや解雇者の復職を求めて起こしたストライキに対して、日本は徹底して弾圧し、五月に従業員の一人を射殺した。学生を中心とした抗議運動は反帝國主義運動に拡大し、五月三日、打倒帝國主義と經濟絶交を掲げたデモ行進が行われた。デモ隊に向かってイギリス警察が発砲し、何秉彝や尹景伊などの学生を含む一三名が死亡し、数十名が逮捕された。六月三日、上海の西門の公共体育館において五卅烈士の追悼会は午後二時一〇分に始まった。五分間、鐘が鳴った後、上海の実業家の鄒志豪が、何秉彝や尹景伊、陳虞欽、唐良生、石松盛、陳兆長、朱和尚、鄔金華などの名の烈士を追悼し、彼らの死は決して無駄ではないことを述べた。代表らは三礼した後には花を供え、厳諤声が祭文を読んだ。五分間の黙祷後、不平等条約の撤廃、租界の回収、日本との經濟絶交、烈士の不死が叫ばれた。祭壇の右側には烈士の衣服と「血涙」の文字、左側には烈士の写真と「傑雄」の文字が掲げられ、下には何秉彝が着用していたスーツ、陳虞欽や陳兆長の長袍、身元不明の死者の衣服が置かれた。追悼会に二〇万人が参列した（『申報』一九二五年七月一日）。翌年五月二九日、烈士公墓の除幕式が行われ、五〇〇〇人が参列した。翌日には、公共体育館で追悼式が行われた。一〇時に始まった式は、一、開会、二、奏樂、三、主席報告、四、三分間の黙祷、五、奏樂、六、電報紹介、七、講演、八、ス

ローガン喚呼、九、奏樂、一〇、閉会と進行した（『民国日報』一九二六年五月三日）。

一九三〇年、新たに制定された国葬法では、国葬は政府の名義において計報を知らせること、政府要員が治喪委員会あるいは大喪典礼承辦処を組織すること、全国の官庁や軍営は半旗を掲げること、出棺日には一〇八発の弔砲を放つことなどが定められた。国民政府は追悼会を「公祭」と称し、国葬や公葬に際して行うことを定めた。民国期に始められた追悼会は、封建制度に基づく葬儀を廃止させ、西洋的な献花や葬儀演奏の慣習を導入し、荘嚴な雰囲気を壊すことなく葬儀を簡略化させた新しい制度であった（邵先崇二〇〇六・一二七）。

伝統中国において葬儀や祖先祭祀は宗族の紐帯を強化する機能を果たしていた。私的な側面を強く持つ祭祀を個人から引き離し、国家的な英雄として公的な場所および方法で祀るのは容易なことではなかった（小野寺二〇〇五・二一三）。そもそも伝統的な宗教観では、「祖先になることができるのはしかるべき死に方をして、かつ正しい葬送儀礼を受けた者のみであり、さらに祖先のステイタスは適切な者から適切な祭祀を受けることによってのみ保たれる」（川口二〇一三・二四一）のである。横死した人間の魂は鬼（幽霊）となり、生者に災いをもたらすと信じられていたため、革命の犠牲となった烈士らは人々に恐れられる存

在であった。一九二〇年代から三〇年代にかけて、民国政府は宗教的な語りと愛国主義的な語りの両方を利用しながら積極的に烈士追悼会を行った。公的な祭祀となりつつあった烈士追悼会に人々が参加したのは、必ずしも愛国主義的な動機に基づくものではなかった(Ho 2004: 129-131)。二〇世紀初頭は、烈士の災いを恐れつつ、墓地公園や記念碑などの新しい景観のなかで、合理的・科学的な烈士の追悼方法を模索していた時代であった。

Ⅱ 中国共産党による追悼会

延安に根拠地を移した中国共産党も烈士追悼会を積極的に行った。国民政府が定めた記念日に式典を行いながら、マルクス生誕日(五月一日)、五卅記念日(五月三〇日)、紅軍成立日(八月一日)のような独自の記念日を設けた(丸太二〇〇五:三三二)。一九四〇年五月二十九日の『新華日報(華北版)』には「五卅を記念する」という論説が掲載され、以下のような文章で始まった。「我々中国革命の歴史には、多くの著名な運動があり、その悲壮で熱狂的な様子は天を動かし、神を泣かせることができる。一九二五年五月三〇日の上海の工場労働者と学生らによる日本とイギリスの帝国主義に対する闘争はまさにその運動の一つであ

る。この運動は当時の反帝国主義の熱狂を巻き起こし、一九二五年から一九二七年の大革命の端緒となった。この運動には、多くの英雄の典型と経験および教訓があり、今日にいたってもなおそれは我が国の極めて貴重な革命の遺産である」(『新華日報(華北版)』一九四〇年四月二十九日)。

烈士追悼会は、社会主義精神を高揚させる効果を持っていた。一九四〇年八月一日、張自忠(一八九一―一九四〇)の追悼会は延安の中央大礼堂で盛大に営まれた。宜昌作戦(棗宜会戦)で死去した張自忠の遺体は国民政府の重慶に運ばれ、簡略な葬儀が営まれたのに対して、延安では礼堂の舞台上に張自忠の大きな遺影を飾り、朱徳、毛沢東、周恩来は「尽国報国(忠誠を尽くし国に報じる)」「取義成仁(正義のために生命を犠牲にする)」「为国捐軀(国のために命を捨てる)」と揮毫し、王明や彭徳懐らも死者を追悼する句を読んだ。「張將軍が国のために殉死したことを全国人民は悲しみ悼む」と祭文を朱徳が読んだ際、追悼会は最高潮に達した(邵先崇二〇〇六:二二八―二二九)。

さらに、一九四四年九月八日に開催された張思徳の追悼会は、中国共産党が進めた葬儀改革における転換点であった(ホワイト一九九四:三二四)。陝西省安塞県で炭焼き釜が壊れて死亡した張思徳の追悼会で、毛沢東は「人民に奉仕せよ」(為人民服務)という以下の演説を行い、死が無駄ではないことを強調した。「我々の共産党と共産党が

指導する八路军、新四軍は革命の隊列だ。我々のこの隊列は人民を解放するためのもので、徹底的に人民の利益のために働くのだ。張思徳同志は我々のこの隊列のなかの一人の同志だ。人は死ぬ運命にある。しかし死の意義は同じではない。(中略)張思徳同志は人民の利益のために死んだのだ。彼の死は泰山よりずっと重い」(毛沢東一九六六・一二七―一二七八)。

また、一九四六年、飛行機事故で死亡した四八烈士の追悼式は、延安だけではなく、各地で開催された。一九四六年四月八日、共産党中央委員の王若飛(一九二九―一九四六)や中国共産党中央職工運動員会書記の鄧発(一九〇六―一九四六)、『解放日報』主宰の秦邦憲(一九〇七―一九四六)、新四軍軍長の葉挺(一九二九―一九四六)らが重慶の国民党との会談を終えて搭乗した飛行機は延安へ戻る際に山西省黒茶山に墜落した。このとき、葉挺の妻の李秀文(一九〇七―一九四六)と二人の子、黄斉生(一九二九―一九四六)、李少華(一九一七―一九四六)、黄曉庄(一九二四―一九四六)、魏万吉(一九二二―一九四六)、趙登俊(一九二二―一九四六)、高瓊(一九三〇―一九四六)の十三名とアメリカ人操縦士四名が死亡した。四月一五日午後二時、延安大礼堂で四八烈士の追悼会が開催され、約二〇〇〇人の幹部が集まった(『抗戦日報』一九四六年四月二一日)。毛沢東は「殉難した烈士に哀悼の意を表す」と題し

て、不朽の英雄たちの死が中国人民に対して団結や共産党への理解を深める呼びかけであり、「死すとも栄光である」(『虽死猶榮』)と述べた(『抗戦日報』一九四六年四月一九日)。王若飛らの遺体は黒茶山から延安へ運ばれ、四月一九日、延安空港の近くで追悼式および公葬が盛大に行われた。開会式には全員が直立脱帽し、二四発の弔砲が打たれた。烈士たちの家族が祭壇に上がって霊前に花と酒を供え、焼香し、祭文を読んだ。祭壇上には烈士たちの写真、花輪に囲まれた「為人民而死」と書かれた位牌、二羽の壮麗な白鶴が置かれ、その後ろに一三名の烈士の棺が置かれた。公葬には朱徳、劉少奇、林伯渠、賀龍らが参列し、祭文を読んだ。公葬後、林伯渠は烈士の生前の業績を述べ、朱徳は烈士の死が中国人民にとって大きな損失であることを強調した(『抗戦日報』一九四六年四月二三日)。

このように追悼された烈士らは、一九五〇年代に烈士陵园に埋葬され、そこに付設した記念館で生前の社会主義建設への貢献が展示された。かつてはモノクロ写真や新聞記事、手紙などが展示の中心であったが、近年、リニューアルオープンした記念館ではパネルや映像、レプリカ、マネキンなどの視覚資料を用いて、若くして死亡したため遺品が乏しい烈士の生前の姿を描き出している。

Ⅲ 烈士陵園の建設

一九五〇年代、烈士陵園が烈士顕彰のための複合施設となるには、死者を追悼する空間としての庭園墓地の建設とソ連の社会主義リアリズムの導入という二つの大きな過程が必要であった。

美しい記憶として死者を追悼する庭園墓地の原型は、ペールラシェーズのようにフランス革命後のパリに誕生した。それは、イギリス式風景庭園にオペリスト型の記念碑を置き、庭園を鑑賞しながら死者を弔うことができるもので、イギリスやアメリカなど産業化が進み、墓地改革を必要とする都市部で広まった（黒沢二〇〇〇・七八―八〇）。二〇世紀になると、死を覆い隠すような美しい庭園墓地は、国民的崇拜の対象として神聖な軍用墓地に相応しいと見なされた。墓石には兵士の永劫性を示す文字が好んで刻まれた（モッセ二〇〇二・八七―八九）。

中国において西洋式の墓地は一九世紀の上海に登場した。一八四六年、イギリスが外灘の山東路に建設した外国人墓地には、礼拝堂を囲むように墓が整然と並べられ、小道には柳や銀杏、椿などの木々が植えられた。緑があふれる優雅な墓地の空間は、当時の中国人に新しい墓の形の可

能性を示した。その後、外国人墓地は増え続け、老北門外国公墓や浦東外国公墓、八仙橋公墓、静安寺外国公墓、白頭公墓、以色列公墓、虹橋公墓、天主教公墓、穆斯林公墓などが建設された（陳蘊茜・呉敏二〇〇七・一二三―一二五）。開港後、上海の人口は増え続けたものの、外国人墓地に中国人は埋葬されなかったため、中国人用の公共墓地の建設が待望された。そこで、一九〇九年、虹橋に中国人が経営する共同墓地として薤露園が建設された。後に薤露園は、国籍および宗教を問わないことから万国公墓と改名された。万国公墓は外国人墓地の影響を受けていたが、中国的な特徴も有していた。墓地には西洋式の追悼式を行うための弔問堂と中国式の読経を行う追想庁が置かれた。万国公墓の建設を契機に、上海で葬儀および墓地の改革の必要性が叫ばれるようになり、こうした過程で記念建造物の性格を持つ烈士墓や無名兵士の墓が建設された（陳蘊茜・呉敏二〇〇七・一三〇―一三四）。

一九世紀の庭園墓地に用いられた新古典様式が中国に導入されると、過剰なほどにその様式が意識された。一九二一年に完成した広州の黄花崗墓苑と一九二六年に竣工した五卅烈士墓は、新古典様式を取り入れたものであった。五卅烈士墓には半球の上に鶏が乗った記念碑と三角屋根を持つ四角の記念碑が作られた。正面に譚延闓による「来者勿忘」の文字、側面に二五名の烈士名、裏面に碑文が刻まれ

た。記念碑の上の雄鶏は「雄鶏が鳴くと世界は明るくなる」ことを意味した（薛理勇一九九九・三八五）。

公式な追悼式を通して一個人の死は烈士の死へと変化した。さらに烈士の物語の一面を彩るためには、死に伴う穢れや恨みを払拭した空間が適していた。芝生に記念建造物が立つ庭園墓地は、センチメンタルでモダンな雰囲気を作り出し、烈士の死の物語を完成させた。

一九四九年以降、中国共産党は、西洋的な墓地および国民政府が定めた記念日を排除し、国共内戦中に破壊された烈士陵園の改修を進めた。上海の老北門外国公墓は一九一二年に上海の城壁が除去された際に一部の遺骨が八仙橋公墓へ移築された。浦東外国公墓と八仙橋公墓、静安寺外国公墓はそれぞれ浦東公園、淮海公園、静安公園となった（薛理勇一九九九・三八九―三九〇）。このように外国人公墓が撤去される一方、ソ連兵を埋葬するソ連軍烈士陵園（蘇軍烈士陵園）は、東北部を中心に急速に増えていった。一九四五年八月九日、中国東北部にソ連兵が侵攻し、終戦後、死亡したソ連兵の墓が黒龍江省や吉林省などの六省と内モンゴル自治区および広西チワン族自治区の二自治区、重慶市にソ連兵の墓が建てられた。最も多く作られた黒龍江省では三八の墓園および陵園が確認されている（田志和二〇一〇）。

その中でも最大規模の陵園は、一四〇八名の烈士が祀ら

れた旅順ソ連軍烈士陵園である（写真4）。本来、旅順ソ連軍烈士陵園は一九世紀末、帝政ロシアが旅順を占領した後、ロシア人墓地（沙俄公墓）として建設されたものである。日露戦争後、一九〇八年、日本は墓地の建設を引継ぎ、一四八七三名のロシア兵を埋葬した。墓地には露国忠魂碑と旅順陣歿露兵之碑が建立された。当時の墓地の中心に建設された露国忠魂碑（現在の日露戦争記念碑）には、「祖国とロシア皇帝、旅順口を守るために犠牲になったロシアの兵士のために」と刻まれた。露国墓地がソ連軍烈士陵園と名前を変え、一九五五年に紅軍烈士記念塔が建設さ



写真4 旅順ソ連軍烈士陵園

（出所）筆者撮影 2011年3月

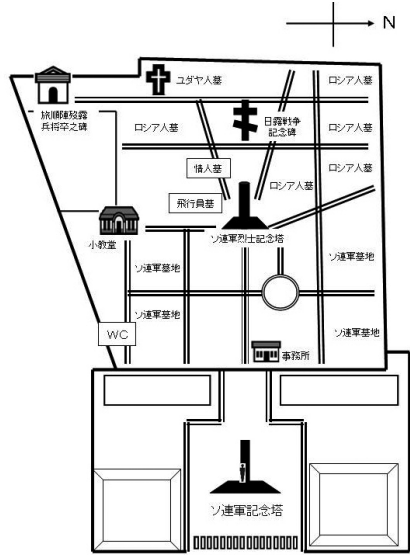


図2 旅順ソ連軍烈士陵園
(出所) 現地案内板より筆者作成

れた。塔の後ろには、一九四五年から五五年に死去したソ連兵と家族および朝鮮戦争で死んだソ連軍パイロットの墓が建設された。

ソ連の影響は多方面で見られた。一九五二年一〇月、北京で開催されたソ連博覧会ではムーヒナ (Yera Mukhina, 1889-1953) の「労働者と女性コルホーズ員」の模型が展示され、「不朽の傑作」と賞賛された。また、展覧会開催に際して、ソ連の美術学院院長のゲラシモフ (Alexander Gerasimov, 1881-1963) が中国を訪問した。さらに、江豊

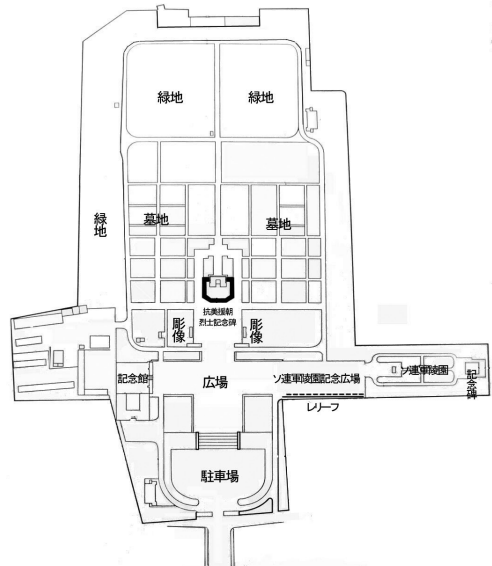


図3 瀋陽抗美援朝烈士陵園
(出所) 現地案内板より筆者作成

(一九二〇〜一九八二) は、芸術分野における彫刻の遅れを指摘し、公園や広場に英雄を顕彰するための記念碑建築が作られるべきであると主張した(『人民日報』一九五四年年一〇月一日)。

広場や公園に英雄記念碑が次々に立てられると、烈士陵园は、社会主義リアリズムと庭園墓地が融合した英雄顕彰コンプレックスのようになっていった。陵园は、烈士の墓あるいは記念碑を主軸として周囲に烈士の墓地、記念館、レリーフ、碑の回廊が建設され、永劫性を象徴する松の木



写真5 瀋陽抗美援朝烈士陵园

(出所) 筆者撮影 2006年8月



写真6 瀋陽ソ連軍烈士陵园 (出所) 筆者撮影 2012年8月



写真7 八宝山革命公墓 (出所) 筆者撮影 2013年8月

が植えられた(図2・3)。その中でも中国特有のものは、毛沢東をはじめとする共産党幹部が揮毫した碑の数々であった。多くの場合碑には「永垂不朽(永遠に不滅である)」と揮毫され、台座には革命を描いたレリーフか、あるいは記念碑建設の経緯が記された碑文が刻まれた。

瀋陽の抗美援朝烈士陵园の中心には、董必武が揮毫した「抗美援朝烈士英霊永垂不朽」と刻まれた記念碑がある(写真5)。記念碑の台座には、「一九五〇 一九五三」という数字と郭沫若による詩が刻まれた。記念碑の北側には、朝鮮戦争の特級戦闘英雄である黄継光と楊根思、一級戦闘英

雄などの一二三名の墓が伝統的な土饅頭をセメントで作られた。抗美援朝烈士陵园は一九五一年、瀋陽の北陵(ホンタイジの墓)の西側に建設され、北陵烈士陵园と呼ばれていた。陵园を入った東側には、ソ連軍陵园がある(写真6)。もともと、ソ連軍陵园は瀋陽の西塔に一九四五年一月にソ連軍烈士墓(蘇軍烈士墓)として建設され、一五五名が埋葬されたが、一九九九年八月に抗美援朝烈士陵园に移築され、将校の墓は花崗岩に名前が刻まれ、二等兵の墓はコンクリートで作られた四角の枠の中に墓石が埋め込まれた。一九五七年四月二日、来中したフルシチョフが



写真8 延安四八烈士陵園（出所）筆者撮影 2008年8月

ソ連軍烈士墓を訪れた（『瀋陽日報』一九五七年四月二二日）。北京郊外に作られた八宝山革命公墓（写真7）に、一九四九年一月、王荷波（一八八二―一九二七）ら一八名の烈士が移送された際には、三〇〇名ほどが参列した追悼会が開催され、周恩来が祭文を読んだ。追悼会が終ると、周恩来と「烈属」らが墓に土をかぶせた（『人民日報』一九四九年一月二二日）。このように一九五〇年代、重慶の歌乐山烈士陵园、広州起義烈士陵园、ハルビン烈士陵园などの烈士陵园で式典が催された。延安では張思徳や四八烈士を埋葬するため、四八烈士陵园が建設された。毛沢東が

「为人民而死雖死犹榮」（人民のためたとえ死すとも榮光である）と揮毫した碑は一九四六年を意味して一九・四六メートルの高さに作られた。墓は三段階に分かれており、最上段には、一三名の四八烈士のうち王若飛、秦邦憲、葉挺、鄧発の四名の墓と延安で病死した中央委員の関向応や張浩、鄭耀南など、二段目には黄斉生と李少華の二名の四八烈士の墓、「工人階級の英雄」と毛沢東に称えられた朱宝庭、『解放日報』の編集長の楊松、張思徳など、三段目には葉挺の妻と二人の子供、黄曉庄、魏万吉、趙登俊、高瓊の七名の四八烈士の墓、賀子珍の母親である温吐秀など二八名の墓が置かれた（写真8）。墓石の上部には遺影がはめ込まれ、下部には略歴が刻まれた。墓の形は地方によって異なるものの、四八烈士陵园のように一つの烈士陵园の中ではほぼ均質的な形が用いられた。

庭園と公園の役目を兼ね備えた烈士陵园は清明節の墓参りの場となった。一九四九年三月、中国共産党は各省政府に対して清明節に烈士記念会を開催し、碑に烈士の名前を刻み、陵园内に植樹することを命じた（『人民日報』一九四九年三月一八日）、同年四月、清明節を「烈士節」と定め、烈士の遺品を収集・調査することを通達した（『人民日報』一九四九年四月五日）。清明節は西暦四月五日頃に相当する漢族の伝統行事の一つであり、この決定は伝統儀礼を迷信と見なした中国共産党の政策と反するように見える。し

かし、政府は清明節を烈士記念日とすることで、烈士を中国の創設者と置き換え、人々が祖先と血でつながっているように、中国人民は共産党への忠誠心と関わりを通して烈士とつながっていると示したのである (Hung 2008: 283-284)。一九五〇年代、清明節に烈士陵園へ参拝する様子が各地の新聞で報道された。たとえば、一九五七年四月五日の『南方日報』では、「紅花開遍烈士陵園」と題して、「清明節に人々は閑静な広州東部の紅花崗に位置する厳肅な廣州公社烈士陵園へ足を運び、一九二七年に建立された広州コミューン——廣州工農民主政権で犠牲となった英雄たちを弔った」と記し、チェコスロバキア共和国の大統領シロキーが烈士墓に献花する写真も掲載された (『南方日報』一九五七年四月五日)。瀋陽では、多くの青年団団員と入隊した児童らが烈士墓を参拝した後、烈士記念碑の前で入団の宣誓を行い、祖国のために犠牲になった烈士に学び、優秀な青年団団員および少先隊員となるために努力することを誓った (『瀋陽日報』一九五七年四月六日)。

このように烈士陵園は単なる墓から国家的な英雄として烈士を顕彰するための式典の場へと変わっていった。それまでの中国の都市にはほとんど存在しなかった広大な広場は、多くの人々が式典に参列あるいは見学しうる空間を提供したのである。

おわりに

革命で命を落とした一個人は、著名な人物による弔辞を主とする追悼会、その人物の小説化あるいは劇化、顕彰記念碑の建設を経て革命烈士へと昇華していった。それは、「大衆に支持される伝説的な英雄へと殿堂入りする過程」(Waldron 1996: 967) であった。革命烈士あるいは戦闘英雄という称号制度は烈士の身分を確固たるものとした一方で、歴史の中に位置付けられた烈士は、「スーパースター級」の烈士以外は、革命の犠牲者という没個性的あるいは集合的な存在となり、社会主義の記憶の一部分を形成していった。烈士が埋葬された墓は次第に大規模な陵園へと変化したし、革命記念碑や烈士記念館も建てられた。全国重点文物保護単位や愛国主義教育基地への指定は、烈士の正当性をさらに高める効果があった。

烈士への殿堂入りの過程は、また、烈士のビジュアル化の過程と重なった。一九二〇年代から四〇年代の追悼会では遺品や遺影が祭壇に掲げられるのみであったが、一九六〇年代に入ると、烈士の姿はプロパガンダ・ポスターに鮮やかに描かれた。劉胡蘭は殺害されて間もない頃は図1の趙一曼のような濃紺の服を身にまとった姿で描かれたが、

一九六〇年代に入ると、赤い服を着た姿に変わっていった。

社会主義リアリズムは烈士のビジュアル化を後押しした。プロバガンダ・ポスターに描かれた烈士は、斜め上を睨む視線と一直線に結んだ口元という険しい表情をしており、首や手足は太めで、腕の筋肉を誇張するようなポーズをとっていることが多い。こうした逞しさを一段と強調するのが太い輪郭線である。一九四七年に国民党に殺害された劉胡蘭は、正確にいえば「抗日英雄」ではないが、「抗日女英雄」というキャプションが付けられている。劉胡蘭がどんな人物であったかということは見る者にとって不明であっても、描かれている人物が烈士であることは一目瞭然である。極端な形式化と単純なメッセージ性が社会主義リアリズムの特徴であり、文化大革命後、大きく批判された点であったが、他方では土産物化に利点をもたらした。同じ形式の多様なコンテンツは、「革命烈士」や「革命英雄」というシリーズものの開発を可能にした。現在、プロバガンダ・ポスターは、図1のトランプをはじめとして、缶バッジやマツチ箱、マグネット、マウスパッド、メモ帳など、多様な商品に使用されている。プロバガンダ用であるがゆえに、かつてのスローガンを振ったパロディ商品や全く別のキャプションを付けた商品も少なくない。こうしたプロバガンダ・ポスターのパロディ化は、現代における

もう一つの形の社会主義の記憶であるが、それは稿を改めて論じたい。

●参考文献

- 王晓葵(二〇〇五)「二〇世紀中国の記念碑文化——広州の革命記念碑を中心に」若尾祐司・羽賀祥二編『記録と記憶の比較文化史——史誌・記念碑・郷土』名古屋大学出版会、二三四—二七〇頁。
- 小野寺史郎(二〇〇五)「民国初年の革命記念日——国慶日の成立をめぐる」『中国』二〇、二〇八—二四頁。
- 川口幸大(二〇一三)『東南中国における伝統のポリテクス——珠江デルタ村落社会の死者儀礼・神祈祭祀・宗族組織』風響社。
- 黒沢真里子(二〇〇〇)『アメリカ田園墓地の研究——生と死の景観論』玉川大学出版部。
- 関浩志(二〇〇五)「英雄の形象化とその変容——新中国成立前後の劉胡蘭像を中心に」『中国』二〇、二五七—二七一頁。
- 武田雅哉(二〇〇九)「雷鋒おじさんに学ぼう!」の画像学」韓敏編『革命の実践と表象——現代中国への人類学的アプローチ』風響社、一三二—一五四頁。
- ホワイト、マーティン・K(一九九四)「中華人民共和国における死」ジェームズ・L・ワトソン&エブリン・S・ロウスキ編『中国の死の儀礼』平凡社、三〇七—三三二頁。
- 丸大孝司(二〇〇五)「時と権力(一)——中国共産党根拠地の記念日活動と新暦・農暦の時間」『社会システム研究』一〇号、二七—四六頁。

宮崎滔天（一九七二）『宮崎滔天全集 第一卷』平凡社。

毛沢東（一九六六）『毛沢東語録』和田武司・市川宏訳、河出書房新社。

モッセ、ジョージ・L（二〇〇二）『英霊——創られた世界大戦の記憶』宮武美知子訳、柏書房。

邵先崇（二〇〇六）『近代中国の新式婚葬』人民文学出版社。

薛理勇主編（一九九九）『上海掌故辞典』上海辞書出版社。

陳蘊茜・吳敏（二〇〇七）『殖民主義影響下の上海公墓変遷』

蘇州大学社会学院編『晚清国家与社会』中国社会科学文献出版社。

田志和（二〇一〇）『永恒的懷念——中国土地上的蘇聯紅軍碑塔陵園』大連出版社。

Harrison, Henrietta (1998) *Martyrs and Militarism in Early Republican China. Twentieth-Century China* 23 (2): 41-70.

Ho, Virgil Kit-yiu (2004) *Martyrs or Ghosts? A Short Cultural History of a Tomb in Revolutionary Canton, 1911-1970. East Asian History* 27: 99-138.

Hung, Chang-tai (2008) *The Cult of the Red Martyr: Politics of Commemoration in China. Journal of Contemporary History* 43 (2): 279-304.

Waldron, Arthur (1996) *China's New Remembering of World War II: The Case of Zhang Zizhong. Modern Asian Studies* 30 (4): 945-978.

『晨报』（一九二五）「国葬尚是問題」（三月一三日）。

『民国日報』（一九二五）「孫先生葬儀大到決定」（三月一四日）。

『民国日報』（一九二五）「各界多主張孫先生用国民葬」（三月一

六日）。

『民国日報』（一九二五）「各界哀悼孫先生」「孫先生今日移靈社稷殿」（三月一九日）。

『民国日報』（一九二六）「今日之五卅紀念」（五月三〇日）。

『申報』（一九二五）「關於滬慘案之昨訊」（七月一日）。

『新華日報（華北版）』（一九四〇）「紀念五卅」（四月二九日）。

『抗戰日報』（一九四六）「中共中委王若飛秦邦憲等同志遇難」（四月一三日）。

『抗戰日報』（一九四六）「今日举行公祭」（四月一七日）。

『抗戰日報』（一九四六）「向四八被難烈士致哀」（四月一九日）。

『抗戰日報』（一九四六）「隆重祭悼遇難諸烈士」（四月二日）。

『抗戰日報』（一九四六）「隆重公葬王秦所烈士」（四月三日）。

『瀋陽日報』（一九五七）「清明節悼念革命烈士」（四月六日）。

『瀋陽日報』（一九五七）「伏羅希洛夫主席向蘇軍烈士墓敬献花圈」（四月二日）。

『南方日報』（一九五七）「紅花開遍烈士陵園」（四月五日）。

『人民日報』（一九四九）「華北人民政府通令清明節隆重紀念烈士」（三月一八日）。

『人民日報』（一九四九）「今日烈士節 華北人民政府 征集烈士史料」（四月五日）。

『人民日報』（一九四九）「王荷波十八烈士移葬京郊革命公墓」（二月二日）。

『人民日報』（一九五〇）「關於革命烈士的解釈」（一〇月一五

『人民日報』(一九五〇)「革命烈士家屬革命軍人家族優待暫行條例」(二月一四日)。

『人民日報』(一九五四) 柏生「美術作品的宝库——紹介蘇聯經濟及文化建設成就展覽會中美術作品」(九月三〇日)。

『人民日報』(一九五四) 江豊「美術工作的重大發展」(二〇月一日)。

『人民日報』(一九五四) 劉開渠「向蘇聯彫塑藝術學習」(二〇月一日)。

●著者紹介●

① 氏名……高山陽子(たかやま・ようこ)。

② 所属・職名……亜細亜大学国際関係学部・准教授。

③ 生年・出身地……一九七四年、宮城県。

④ 専門分野・地域……文化人類学、東アジア。

⑤ 学歴……慶応義塾大学文学部(民族学考古学専攻)、東北大学大学院環境科学研究科(環境社会人類学専攻)。

⑥ 職歴……大学講師(三三歳、五年)、大学准教授(三八歳、三年)。

⑦ 現地滞在経験……中国重慶(高級進修生、二七歳、一年半、帰国後、一〜二ヶ月の調査を断続的に実施)、三三歳から一〜二週間の東アジアおよび欧米の記念碑調査を実施。

⑧ 研究方法……中国留学中は中国西南地域においてフィールド調査を実施、近年はプロバガンダ・アートをを用いた土産物を収集。

⑨ 所属学会……文化人類学会。

⑩ 研究上の画期……中国の紅色旅游(革命観光)や旧社会主義国の博物館における社会主義の展示。社会主義博物館で販売されているプロバガンダ・アートの土産物には国や地域によって違いがあり、その地域の人々がどのように社会主義を想起するかを考えさせてくれる。

⑪ 推薦図書……Chang-Tai Hung(2011) *Mao's New World: Political culture in the Early People's Republic*. Ithaca and London: Cornell University Press. 天安門広場や革命烈士顕彰などの社会主義の諸制度・諸施設の文化的側面を論じた本。